



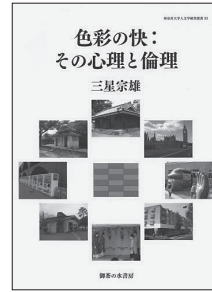
このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

色彩の快 その心理と倫理

三星宗雄

本書のキーワードは、遠感覚と近感覚、色彩の地理学そして色彩の倫理学です。遠／近感覚という感覚の二分法は現在あまり使われていませんが、感覚を進化的な視点から考えるとき当然参照されるはずで、色覚は遠感覚としての視覚の一つですから、遠感覚的な特性を持っています。本書ではその問題提起にとどまりましたが、たとえば色の嗜好性なども遠感覚の文脈の中で分析するなら新しい側面が見えてくるように思われます。色彩地理学は一部の研究者にとってはなじみ深い言葉ですが、

しかし色彩研究全般にわたって浸透しているようには思われません。そこであらためてその再発掘を試みました。色彩研究と地理学とのコラボレーションはもっと注目を浴びていように思われます。最後の色彩倫理学は、著者の造語ではありません。2013年に中国の大学で講演を行った際、その大学の学長が語ったと、その令嬢（神奈川大学大学院生）から聞きました。今日の色彩研究が直面する実際問題はまさに色彩倫理学です。本書が色彩の活用の上で少しでも提案できていたら望外の喜びです。



著 三星宗雄
発行 御茶の水書房
A5判 / 318頁
定価 本体9,600円＋税
発行年月 2014年3月

みつほし むねお
神奈川大学人間科学部教授。専門は実験心理学、色彩心理学、環境色彩学。著書はほかに『色の心理学』『環境色彩学の基礎』（いずれもマックローリン出版）、『世界の色の記号』（編著、御茶の水書房）、『基礎からの心理学』（共著、おうふう）、『考えるための心理学』（分担執筆、武蔵野美術大学出版局）、『動物は色が見えるか』（訳、兎洋書房）など。

ザ・ソーシャル・アニマル [第11版]

人と世界を読み解く社会心理学への招待

岡 隆

1972年の初版以来、4年ごとに改訂を重ね、第11版です。第3版と第6版が邦訳されていますが、それから20年、社会心理学は活発な科学として新しい理論や発見を生み出し続けており、その社会心理学が責任ある科学として向き合わなければならない現実の世界は大きな変化を経験し続けています。この本が、研究の進展と社会の変化を見据えながら、この間に大幅に内容が更新されたのを受けて、最新版を翻訳しました。

この本で扱われている現実の諸問題は、主に合衆国が関わって国

内や世界で生じているものです。しかしながら、この本で扱われている社会心理学の理論と発見は、日本をはじめとして多くの国と地域と、そこに住む人々に応用することができる普遍性をもったものです。この本の具体的事例が、日本人や日本で、どのようなかたちで立ち現われているかに、思いを巡らせていただくと幸いです。

著者はアメリカ心理学会120年の歴史で優秀研究賞、優秀教授賞、優秀著作賞のすべてを受賞した唯一の人物です。研究と教育と著作の融合をお楽しみください。



訳 岡隆
発行 サイエンス社
A5判 / 528頁
定価 本体3,800円＋税
発行年月 2014年4月

おか たかし
日本大学文理学部心理学科教授。専門は社会心理学。著書はほかに『社会的認知研究のパースペクティブ』（編、培風館）、『心理学研究法5 社会』（編、誠信書房）、『心理学研究法』『社会心理学小辞典 増補版』（いずれも共編、有斐閣）、『21世紀の学問方法論』（分担執筆、富山房インターナショナル）、『講座社会言語科学6 方法』（分担執筆、ひつじ書房）など。



著 羽生和紀
発行 朝倉書店
A5判 / 196頁
定価 本体2,800円+税
発行年月 2014年6月

はにゅう かずのり
日本大学文学部心理学教授。専門は環境心理学。著書はほかに『環境心理学』（サイエンス社）、『心理学の基礎英単語帳』（啓明出版）、『複雑現象を量る』（共著、朝倉書店）、『環境心理学の新しいかたち』（分担執筆、誠信書房）、『自然をデザインする』（監訳、誠信書房）、『犯罪心理学』（監訳、北大路書房）など。

心理学のための英語論文の書き方・考え方

羽生和紀

日本の論文誌であれば受理される水準の論文を、そのまま英語に訳して英語圏の論文誌に投稿しても受理されない可能性があります。それは、英語圏の論文誌のほうがレベルが高く、採用の基準が厳しいということをかみならずも意味しません。英語の論文と日本語の論文では形式に違いがあるために、慣れない日本人の書いた日本語式の英語論文は不利になってしまうのです。そこにはアカデミックライティングという文体・文章作法の問題があります。また、とくに序論と考察における構成や展開

方法の違いがあります。こうした形式の違いにより、日本人の書いた英語の優れた研究内容の論文が正当に評価されないことがずいぶんあるようです。

本書は、そうした心理学の英語論文特有の形式というものを意識した、大学院生やこれまであまり英語の論文を書いていない若手研究者のための入門書です。ささやかなものですが、個人的な知識や経験が共有できればと思いこんな本を書いてみました。レシピ本というよりは、技術を習得するための方針を示した教則本になっています。



著 森口佑介
発行 新曜社
四六判 / 320頁
定価 本体2,400円+税
発行年月 2014年3月

もりぐち ゆうすけ
上越教育大学准教授。科学技術振興機構さきがけ研究者も兼任。専門は発達心理学・認知神経科学。著書はほかに『わたしを律するわたし：子どもの抑制機能の発達』（京都大学学術出版会）、『発達科学の最前線』（分担執筆、ミネルヴァ書房）など。

おさなごころを科学する 進化する乳幼児観

森口佑介

研究における最先端は、細先端でもある。科学は細分化して進展するものだし、一つの研究では一歩しか進めないのだから、それも仕方がない。問題は、その細い先端にどれだけ意義を持たせるか、である。先端を支える幹が細すぎれば意義は小さいものにしかならない。一方で、幹を太らすことばかりに気を取られては、先端はなかなか生えてこない。先端と幹のバランスは難しいが、どちらが欠けても真の最先端研究にはならないだろう。そういう思いでこの本を書いた。本書は、過去か

ら現在、未来に至る乳幼児研究の系譜を紡いできた知見を、批判的な視点を交えつつ、紹介したものである。個人的なキャッチフレーズは「プラトンからゴブニックまで」。第8章「仮想する乳幼児」では、筆者が現在取り組んでいる「空想の友達」研究も紹介している。空想の友達とは、子どもが持つ目に見えない友達のことで、おさなごころを考える上で重要なトピックである。心理学の研究者はもちろん、他分野の研究者や学生、乳幼児に関心のある一般の方にもぜひ手にとっていただきたい。